

覇権交代4

マラッカ海峡封鎖

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 マラッカ海峡封鎖	20
第二章 掃海部隊	41
第三章 釜山沖にらみ合い	71
第四章 古戦場跡	97
第五章 奇襲作戦	124
第六章 バイパー・ストライク	150
第七章 醜い妖精	178
第八章 生き残る	206
エピローグ	230

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易されている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引く張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：
ボーンズ。

かわにし まきふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

お だ ぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。
ス。

あ び ろ あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

あかばねたく ま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：
ム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あま り ひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉
の同期。

〈水陸機動団〉

し ば ひかる
司馬光 水陸機動団教官。香港に潜入して、本土派と接触している。

うえぞのひろ き
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。

はかま だて る お
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかた しん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわな がは まれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむら しげ と
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかさばら けいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むら た もり と
村田護人 三佐。村田家次男。

むら た りん こ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

〔西部方面隊〕

は むろ やす の り
葉室泰徳 二佐。西部方面隊西部方面ヘリコプター隊の副隊長。村田
護人三佐が教育部隊を出てはじめてUH-1汎用ヘリの操縦棒
を握った時の上官。

わ じ ま む ず え
和嶋瑞恵 一尉。CHのベテラン機長。

〈海上自衛隊〉

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさ や
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめ や とし お
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかお と
板東兼人 一佐。"かが"、艦長。

かおきか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら みさ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ごみ いき み
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

え がわ とし き
江川俊樹 海将補。

たけうち こうすけ
竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦"ほうしょう"〕

いずみ だ せん えい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐち はじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あす か
宮城明日香 一尉。気象班長。

〈航空自衛隊〉

〔二〇二飛行隊〕

むらた なき と
村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈統合幕僚監部〉

こいそ こより
小磯小代里 統合幕僚監部参事官付国外運用班長。青柳睦己と岩倉久彌を尻に敷く督戦隊の官僚三人組の一人。制服組からは蛇蝎の如く嫌われている。

〈防衛装備庁〉

しまぎ さつ し
島崎蒼士 技官。航法援助のシステム開発を行う若手。

〈海上保安庁〉

う がき せい し りう
宇垣詠志朗 二等海上保安正。"なつぐも"、艇長。

いしばし だいすけ
石橋大介 三等海上保安正。"なつぐも"、副長兼機関長。

うめ の ゆきよし
梅野征悦 二等海上保安士。"なつぐも"、レーダー担当。

《内閣府》

こが はじめ
古賀肇 内閣府政策統括官（経済財政運営担当）。

《内閣官房》

あおやぎむつき
青柳睦己 内閣安全保障・危機管理室室長補佐。若手防衛官僚のホープだが、慎重派。海南島上陸作戦にも反対していた。

《外務省》

いわくらひさや
岩倉久彌 総合外交政策局安全保障政策課課長補佐。北米課が古巣。自ら国務省霞ヶ関出張所と自嘲するほどの対米従属派。

〔吉野ヶ里〕

もり た こう たろう
盛田浩太郎 吉野ヶ里中学校の校長。

しらかせいつと
白崎征途 吉野ヶ里中学校の教頭。

かはら さや
華原沙也 吉野ヶ里中学校の音楽教師。

ムンヒョジョン
文曉庭 韓国から交換留学で吉野ヶ里中学校が受け入れていた若い教師。九大に留学していた。

はむつばき
葉室翼 吉野ヶ里中学校の新聞部部长。

えだの きみえ
枝野君枝 吉野ヶ里中学校の新聞部員。玄武ミサイルで軽傷を負う。

うがきいみ
宇垣詠美 記者。地元新聞社の入社三年目。全国紙を落ちて地元新聞社に就職。佐賀出身で宇垣詠志朗二等海上保安正の妹。

さわいめぐ
澤井芽俱 インターネット・メディア会社の編集者にしてライター。
“ゆう君ママの戦場リポート、を配信している。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〔ソウルアメリカ大使館〕

ロバート・Ｂ・ワイズナー 大使。元太平洋軍司令官（海軍大将）。

コーディ・Ｒ・キム 政務官。国務省のキャリア外交官で、ワイズナーが韓国へ赴任する時、自ら指名してソウルに連れてきた人物。

〈海兵隊〉

セリーヌ・Ｄ・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

〔第三海兵遠征軍〕

ウェイン・Ｒ・ヴァンペルト 中将。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35Bのパイロット。

〔第三海兵師団第三偵察大隊B中隊〕

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊
フォース・リコーン
武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラー中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

中国

《中央弁公庁》

ファンジュエマオ

範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

チョアリイ

賈 礼 日本の中国大使館経済処参事官。

〈陸軍〉

〔海南島独立守備隊〕

マオアイトン

毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアンクアンイン

黄冠英 大佐。作戦参謀。

〔第一〇一待機旅団〕

リンカン

林剛 大佐。これまでの功績により昇進し、新たに第一〇一待機旅団の指揮をとることになった。

シイモン

石萌 中佐。ハワイでの戦いにおいて情報参謀として素晴らしい働きをみせて中佐に昇進し、部隊を率いることになる。

スットン

蘇桐 中佐。情報参謀だったが、石萌が参謀長役を固辞したため参謀長に昇進。

〔第22連隊〕

チイエホンタマ

銭宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウワイエ

侯燁 少佐。銭の部下。

大韓民国

《国家情報院》

リュージュニ

柳珍熙 副長官。

チジュンユル

池俊烈 中佐。副理事官。

ホンウンソン

洪應善 韓国大使館参与の肩書きをもつ。融和委員会のメンバー。

〈空軍〉

〔第11戦闘航空団〕

ソンギョング

孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オキョング

呉京周 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

ビョングンミン

辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル

金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〔海軍第五戦団〕

オムジョンウオン

嚴鐘元 大佐。参謀長。

ナムジフン

南智勲 少佐。金寿鉉、艇長。

チャンイルジェ

張日載 大尉。副長。

〈海兵隊〉

ソンジュウオン

孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒョサン

斤孝相 大佐。

バクミンア

白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨンデウン

鄭大恩 少佐。副隊長。

〔第二海兵師団〕

ユンベクヨン

尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

///シンガポール///

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。夫人は香港人の民主運動家である姚芳芳。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

〈海軍〉

ゴー・チョク・テオ 大佐。

覇権交代 4

マラッカ海峡封鎖

プロローグ

後にそれは、一九七五年四月末日のサイゴン陥落になぞらえて「シンガポール陥落」と呼ばれることとなった――。

東南アジアの盟主を自認するシンガポールには、南シナ海条約機構、通称SATO艦隊の陸上司令部が置かれていたため、このシンガポールのSATO艦隊からの脱退は大混乱をもたらした。

これは事実上、シンガポールが米国とその同盟国を裏切り、中国と組むことの宣言でもあったからだ。

ただしシンガポールは、アメリカから空爆と機雷封鎖を受けた韓国の二の舞を避けるため、SATO

TOTO艦隊からの脱退を表明したのみで、いかなる軍事行動もとらず外国人の追放も行わないことを宣言したが、夜が明けて事態が公になる前から混乱がはじまっていた。

SATO艦隊陸上司令部がブルネイへと移転されることと決定した後、シンガポールのアメリカ海軍基地内の司令部に詰めていた各国の士官らも、シンガポール政府が安全を約束した航空便でひとまず隣国のクアラルンプールへ脱出した。その中には、十数名からなる海上自衛隊の派遣団もいた。陸上司令部自体は、作戦運用の機能はもたない。任務のほとんどは補給関係で、作戦指揮は洋上部

隊に任されているからだ。

シンガポール司令部に制服組を率いて乗り込んでいたのは、つい前年までシンガポール駐在武官を務めていた安野久信やすのひさのぶ一佐だった。

安野は、部下をクアラルンプール国際空港の一角に待機させるとマレーシア軍が差し向けたパトカーに乗り、空港の南にあるポート・デイクソンへと向かった。

リゾート・ホテルが建ち並ぶ岬の港には、大型ボートが停泊していた。港に灯りはなく、ホテルから漏れる光で辛うじてそのシルエットがわかる程度だ。

船体全体は、黒く塗られている。マレーシア海軍の演習で何度か見たことがあった、スウェーデン製のCB90型高速強襲艇（二〇トン）だ。最高速度四〇ノットが出る、サイバーなデザインの強襲艇で、ここではもっぱら海賊かいぞくや密漁対策で使わ

れていると聞いていた。

護岸では、アメリカ・アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局取締局のジャンパーを着た東洋人が待つていた。ティモシー・リー捜査官だ。彼は三〇代半ばで、身長一六五センチ前後の短髪、現地の雰囲気に溶け込める容貌ようぼうの持ち主だった。

狭いブリッジに上がって艇長に挨拶し、後部のメイン・キャビンに移る。そこで、マレーシア海軍情報部の若い中尉を紹介された。キャビン奥には、海軍特殊部隊「パスカル」の一個分隊が無言で待機していた。

リー捜査官は「中尉とは長い付き合いだから、彼の存在は気にしなくていい」と安野へ言ってきた。メイン・キャビンは、明らかにコマンドの待機室となっており、両舷の舷側の壁に沿ってシートが配置してある。輸送機のような構造だ。

リーと中尉は、安野の向かいに並んで座り、シ

ヨルダー・ハーネスを装着した。するとすぐに強襲艇はエンジンを唸らせ出航する。

艇内は、互いの耳のそばで怒鳴らないと声が聴き取れないほど煩い。速度が上がると波が船底を叩き、身体が跳ね上がる。

リー捜査官は、足下に置いたザックを開けると、安野にファイルを手渡した。赤い暗視照明で、目がチカチカする。

「江南港湾興業公司。港湾関係のサービスを担う中堅会社で、護岸の整備からブイの設置、最近では港湾業務そのものまで手を広げていた中国の新興企業です。珍しく政府の資金が入っておらず、純然たる民間会社だ。党の要人が、それなりの株をもつてはいるようですがね。ここマレーシアや対岸のインドネシア、シンガポールでも手広く商売している。この戦争がはじまる直前、つまり中国が仕掛けた電力ダウンが原因で、JFK空港で

旅客機が墜落してすぐ、クアラルンプール郊外にある工場で、妙なものを作りはじめたという通報がわれわれへと入りました」

「われわれ？」

「はい、アメリカ大使館に、直接通報がありました。密告は、その会社の現地人従業員から。何かの設計図だといって、この図面も届けられた。ところで安野さん、ATFとわれわれは、ここではもっぱら薬物の取締で協力関係を築いています。もちろん一般的なテロ対策でもマレーシア政府に協力はしていますが、自分も専門は麻薬方面であり爆発物は専門外です。その方面は、FBIやCIAの担当なので。この情報は、すぐにATFの脅威評価センターに送られたものの、何しろ米中の危機は一気に戦争へと発展し、誰もがそれぞれころではなくまりました。この情報は、巨大な官僚機構の中に埋もれていった。それが昨夜、シンガ

ポール陥落で蘇よみがえったというわけです。まあ、自分が指摘したんですけどね。そう言えば、返事がきていませんが、この前そちらに送った情報には目を通していただけましたか？」

資料にあつた絵図は、明らかに浮標の類のもので、機雷には見えない。

「それで、その会社で機雷を作れたとして、爆薬はどうするんですか？ 中国企業といえども、簡単に持ち込めないのでは」

「そこが肝心なのです。いわゆる、アンホ爆弾でしょうね。一九九五年、オクラホマシティで連邦ビルを吹き飛ばした」

「肥料爆弾を、軍事で使う？」

「ええ。原料は世界中のどこでも手に入る。製造方法も、ネットに上がっています。ブイの大きさを考えると、大量に火薬を詰められる。検討したうちの専門家は、一発でイージス艦を転覆できる

と言っていました。慌てて今夜、その密告者と接触しましたが、工場には中国から持ち込まれた大型の3Dプリンターが設置されていて、たいがいのパーツはそれで作れますね。金属部品に至るまで。普段はそれで補修用パーツを製造しているが、ここ一週間は警備を立てて従業員がわからない代物を中国人たちだけで造っている。——そのパーツが、これです」

リー捜査官は頁ページを捲めくる。安野は、掃海幹部の経験もあるため、それが何であるかすぐにわかった。

「これはまた、時代ものの触角センサーですね」

「そうです。構造はとてもシンプルで、朝鮮戦争時代の機雷に毛が生えた程度だそうです。米海軍の見立てでは、磁気センサーの類は組み込まれていないと。ですがこの往來が激しいマラッカ海峡で磁気センサーを組み込むと、機雷があつという間に全部爆発して底を突くというか、海峡が安全

になるから、それを防ぐため、わざと触角とGセンサーだけで済ませたのでしょう。Gセンサーも組み込まれているので、大型船が近くを通過すると、その波の圧力を感じて爆発するそうです。残念なことに、密告者から話を聞こうと動いている最中、会社の浮標作業船が二隻出航しました。

マレーシア警察が工場に踏み込んだ時には、肥料の空き袋が散乱しているだけだった」

「何発くらい作って持ち出したのですか？」

「少なくとも、三〇発以上は生産していたはずですよ。一発あたりの爆発威力は、TNT火薬で数百キロ相当だそうです」

「……うちのP-1哨戒機が向かっていますが、とても間に合わない。こちらの航空機は出ないのですか？ 空から探した方が早いでしょうに」

「夜間ですからね。ヘリは暗視装置が無いと役に立たないし、仮に哨戒機を飛ばしても最終確認は

洋上からするしかない。基本的に、軍の航空部隊に夜間の洋上哨戒能力は無い。これまではシンガポールがカバーしていましたがね。インドネシアの哨戒機を呼ぶという手もありましたが、何しろこちら側で起こったことなので」

「困ったな……。日本から掃海艇部隊を呼ぶとなると最低でも二週間はかかるし、その戦力も釜山の機雷掃海に割かれて、どの程度動かせるか……」

「そこがよくわからないんですが、われわれは海南島で韓国軍と交戦中なのに、どうして裏切り者の韓国を助けてやるのですか？ 封鎖に成功したのなら、このまま飢えさせてやればいいのでは。彼らは、ただの裏切り者です」

「そう簡単にいかんのです。釜山には日本人、アメリカ人を含めて大量の外国人避難民が殺到している。ところが港湾が機雷封鎖され、脱出するた

めの船舶を出せない。真つ先に飢え死にするのは、住民ではなく彼ら避難民ですからね。日米両政府としても、避難民が脱出するための港は掃海することを約束するしかなかった。同胞のための措置です」

「なるほど。……話を戻しますが、ここは狭い海域です。作業船の速度はしれているし、特徴的な船体だから、この速度の強襲艇であればすぐ見つかるだろうとうちの海軍は言っていました。シンガポール方面へ向かう可能性がありましたか」

「どうだろう。個人的な見解を言えば、ここにはらまかれる可能性が高いと思います。この一帯に機雷を敷設すれば、クアラルンプール港に出入りする船舶も止めることになる。それは、中国政府の明確なメッセージになるのです。マレーシアはどちらに付くのだという脅しにね」

突然、強襲艇の速度が落ち、艇長が「ブリッジ

に上がってください」と言ってきた。

早くも目標を発見したようだ。しかしそれは吉報ではない。

こんな沿岸部で発見したということは、作業船はすでに機雷投下を終えて帰投中ということなのだから。

オイル・ショック以来、日本が悪夢のように恐れてきたマラッカ海峡封鎖という事態が起ころうとしていた。

南シナ海を巡って小競り合いを繰り返していた米中は、中国による、悪戯いたずらレベルの北米大陸電力網へのハッキング攻撃が、不運にも空港設備の機能不全を招き、離着陸中の複数の航空機が地上で衝突炎上するという大惨事にまで発展した。

これをきっかけに米中は直接砲火を交え、米軍

は南沙諸島の人工島を爆撃。中国軍はその報復としてハワイ、オアフ島への着上陸作戦を敢行した。米側はこれをなんとか撃退した後、すぐに自衛隊とともに海南島に上陸作戦を行うが、補給路は延びきり、中国はお得意の人民の海戦術に徹する。作戦は、必ずしもうまく進んでいるとは言えなかった。

そうこうしている中、様子見を行っていた韓国が中国に寝返り、日本へ放たれた玄武ミサイル^{げんぶ}が多くの民間人を殺傷。日韓関係も一触即発状態となる。

アメリカはこの韓国の態度に激怒。全国の港湾を航空機雷で封鎖した上、原油備蓄基地や主要空軍基地やレーダー・サイトも攻撃した。

結果、韓国では電力網がダウンし、全土が停電する事態に陥る。そして、北朝鮮並みの飢えがはじまろうとしていた。

中国は、鴨緑江を越えて韓国への物資援助を開始したが、アメリカは鴨緑江にかかる橋全てを破壊し、この補給路も断った。

一方、中国は東南アジア^A諸国^A連合^N各国に働きかけ、遂にシンガポールを寝返らせたのだった。

第一章 マラッカ海峡封鎖

陸上自衛隊水陸機動団は、米海兵隊の後を追つて中国大陸南部から南シナ海に突き出た形の島——海南島に上陸していた。

自衛隊の海南島上陸は、国民に報されることな
く進行している。幸い、交戦もなく橋頭堡きやうとうほの確
保や、海岸線から少し北に移動した人民解放軍最
大の航空基地の占領にも成功。その夜、裏山に立
て籠もる残存兵と激しい戦闘になるも、辛くも撃
退した。

しかし、水機団はその後もそれなりの犠牲を払
い続けることになった。守り切った陵水基地はほ
んの半日でフル運用可能な航空基地へと変貌し、

補給物資を運ぶ航空機がバシー海峡へ行列を作つ
たほどだ。そして、水機団が解放軍の興味を引き
つけている間に、米海兵隊は一気に空から海南島
北西部にある加來基地ジャライを攻略し、これもほぼ無傷
で占領した。

すると、アメリカ軍は陸自に補給路の確保を要
請してくる。陵水基地の整備が終わり暇になつた
だろうから、次は全島を支配下に置いて置けること
をアピールするため、ロジを開拓して維持せよと
いう命令が届いたのだ。

陵水基地から加來基地までは、内陸部の曲がり
くねった道路を二五〇キロ走る。敵はいくらでも

仕掛けるチャンスがある。陸自は、敵がこちらの意図を悟る前に動かねばならないため、コンボイを仕立てて、危険な夜間移動を試みたのだ。

あと少しで加來基地という場所で敵が仕掛けてきたが、幸いにして航空部隊の援護で乗り切れた。しかし、敵と交戦したポイントから加來基地まではまだ七〇キロはあり、しかも内陸部にある数多の町も突っ切らねばならない。

部隊を率いる特殊作戦群隷下の第一空挺団第四〇三本部管理中隊、その実、特殊部隊の〈サイレント・コア〉を率いる土門康平^{どもんこうへい}一佐は、これ以上の敵の襲撃はないものと判断したが、もちろん油断はしていなかった。

敵は路肩爆弾や地雷を埋める時間はあつたはずだが、今のところその気配はない。敵はいったん退いたか、われわれの狙いが当たり、敵が対応する間もなく進撃できたということか。

今はまだ暗視ゴーグルが必要だが、一時間後には夜も明けてくる。ドライバーの疲労もピークに達しており、交代も必要だ。

中国によるハンターキラースター衛星の攻撃の結果、GPSナビはすでに使えない。車両が途中で迷子になったら、目的地に達するのは難しくなっている。本来なら、ドライバーが交代する時間も惜しんで突っ走りたいが、自分たちがどこを走っているかを確認させるため、要所要所で隊列を止め、ルートを確認し、ドライバーを交代させた。まるで、アフリカか南米のラリーに参加しているような状況だ。

隊列は、輸送トラックだけでも四〇台になる。警備車両を含めると、全車列は数キロの長さなのだ。攻撃を受けた時、共倒れを防ぐために車間距離を十分に確保したためこうなった。

加來基地へと抜ける最後の要衝であり人口一〇

○万を抱える海南島第二の都会、儋州^{ダンヂョウ}市へと入る。なるべくなら市街地は避けたかったが、耕作地帯は道があまりに細く、夜間の走行は危険だ。

307省道を走りながら、街に入る手前でドライバーを交代させ、土門は最後の休憩をとらせた。ここもひっそり通り過ぎたかったが、そうもいかない。海兵隊の武装ヘリ部隊を呼び、彼らに上空援護させる。

住民のほとんどは、まだ市内に留まっている。それほど早くに米軍がやってくるとは想定しなかったのだろう。

しかし、もしこのルートを補給路として恒常^{こうじょう}的に使うことになれば、ここでの市街戦は避けられなくなるはずだ。日中は山間部を走れなくもないが、夜間は無理だろう。

ここで戦えば、シリア並みの瓦礫^{がれき}の山ができてしまう。国際社会から非難されるのは確実だ。

だが、一度確保したルートは二四時間維持するしかない。それができなかったため、米軍はアフガンでもイラクでも、路肩爆弾にやられたのだ。

陵水基地を出発した時は、海兵隊はすぐにも武装ヘリを飛ばしてくれるとのことだった。実際、それは飛んできた。だが、GPSナビが遂にダウンしたために引き返していたのだ。

しかし今は、いくら島全体が停電しているとはいえ、この大都市を目前にして、ナビに不安があるとはいえない。

車列は、耕作地帯のど真ん中で止まっている。道の両側は防風林で目隠しされているため歩兵が潜んでいる可能性はあったが、少なくとも対戦車ミサイルや戦車から狙われずに済む。男たちは小便もできるし、女性隊員も同伴させたトイレ・トラックに籠もることも可能だ。

土門は部隊中程に位置しているブッシュマスタ

ーを路肩に止め、すぐ後ろのハイエースに歩み寄った。その車の周囲にはコマンドが散開し、木立に入って車両を守っている。それだけの大物が、この車には乗っているという証拠だ。

事実、車内には、防衛省の官僚二人に外務官僚がいる。しかもうち二人は、前夜の戦闘で負傷をしていた。本来なら速攻で国内に引き揚げているところだが、役人としての意地があり踏みとどまっていたのだ。

またその車には、若いママさん通訳も同乗していた。軍政を敷くため、通訳として大勢の民間人を拉致^{らち}同然に日本から連れてきたのだが、彼女はその中の一人だった。

土門はハイエースのスライド・ドアを開くと「ここが最後のトイレ休憩になります」と告げた。

外務省北米課のエース、総合外交政策局安全保障政策課課長補佐の岩倉久彌^{いわくらひさよ}が衛星携帯で喋って

いる。どうやら相手はアメリカ軍の誰からしい。電話を切って「急いでください。海兵隊が増援を必要としているそうです！」と土門に要請してきた。

「増援？ 敵と交戦中なのですか？」

「基地に接近する敵部隊を発見したため、打って出たそうです」

「……ご冗談を。オスプレイで乗り込んだ歩兵の数は、せいぜい二個中隊。車両はオスプレイに積めるジープ擬き程度でしょう。迫撃砲小隊くらいは随伴しているだろうが、自分たちから基地の外に打って出るなんて自殺行為です」

「海兵隊はここまで大規模な戦闘を経験することもなかったため、うずうずしていたんでしよう。とにかく、急ぎましょう！」

「岩倉さん、何か誤解していらっしやるようだが、この部隊は補給部隊であって、歩兵部隊でも機甲

部隊でもありませんよ」

「しかし、最大三個小隊が護衛についでいる。それは、戦力と言っているのでは」

「無事に辿り着ければ、ですがね。米側に言ってください。われわれは補給部隊であり、戦闘力はミニマムのため期待するな、と。運用班長、ちゃんと会話を聞いておいてくださいね。外務省は、すぐにできもしない約束を米側として、われわれをきりきり舞いさせる」

土門は、統合幕僚監部参事官付国外運用班長の小磯小代里こいそこよりに頼んだ。

「そうは言っても、土門さんの部隊だけで大隊規模の活躍はするでしょう」

「時と場合によっては、ですよ」

上空援護に現れたばかりの海兵隊のヴァイパー武装ヘリ部隊が、ここを離れていく。海兵隊の応援に向かったのだ。

「敵の戦力は、どの程度か言っていましたか？」

「多めに評価しても、連隊規模だろう」と、岩倉が応じる。

「地の利のある連隊規模の敵に対して、基地も守らなきゃならない連中が、中隊程度で飛び出していったのですか」

「海兵隊って、そういうところですよね」

岩倉は、しょうがないという雰囲気と言う。

戦場は、ここから直線距離で三〇キロ離れている。武装ヘリ部隊がロケット弾攻撃を開始し、地平線の彼方が赤く染まるのがわかった。

まだ砲声は聞こえない。ということは、敵に野砲部隊はいないということだ。

「運用班長、ここから引き返すという作戦はナシですか？」

土門は小磯に質す。小磯は、女辻参謀の異名をもつやり手だ。土門は続けて尋ねる。

「基地に荷物を届けただけで引き返すというわけにはいきません。われわれは、施設部隊のドーザーやショベルカーも運んでいる。施設の操縦員だけ残してはいけない。引き返すにも護衛はいるのです。一方、海兵隊が外で戦うというなら、作業する仲間の警備もしなきゃならない」

「なら、そうするしかないわね。陵水基地はしばらくは安全でしょうし、兵隊が戦場に向かうのは仕方無いんじゃないか？」

小磯は至極真つ当なことを言った。

ここでトイレ・トラックが背後から近づいてくる。まずはVIPからだ。

「私はいいわ。我慢します」

「行つてください。向こうは戦場です。着いた途端にドンパチがはじまる危険もある。のんびりトイレに行けるのも、今だけです」

「そうね。死んだ瞬間にズボンに水浸しにするの

は、女として避けたいわね」

運用班長とママさん通訳がハイエースを降りた。「水分補給もしつかりと！」と、土門は彼女たちの後ろ姿に呼びかける。

「岩倉さんも小まめに、普段より多めに水分を取ってくださいね。でないと、傷の治りが悪くなる」

怪我の具合は岩倉が一番酷い。右手の甲を、アサルトで撃ち抜かれていた。彼は外交官のプライドだけでここに踏みとどまっているが、元はいえれば自衛隊に一言も相談なく決行された海兵隊の加来基地攻略で、米軍から要請された補給作戦を自衛隊に強く進言したのは彼自身だ。それが、日米同盟への確固たる意思表示なのだと主張して。外務省は、昔も今もこの調子なのだ。

「ここまでは、割と平和でしたね」

「敵の組織的な襲撃がたったの一回で、それを航空支援で運良く潜りぬけられたことを幸運だった

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。